

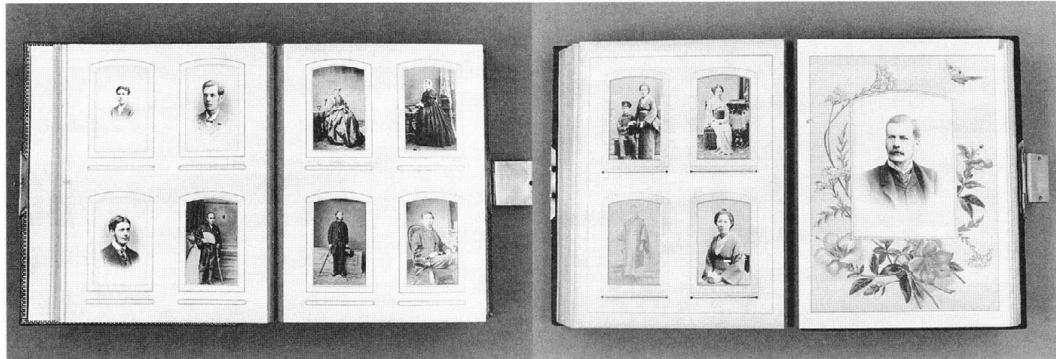
## NEWS

# 開港のひろば

編集・発行／横浜開港資料館（財横浜開港資料普及協会）  
発行日／平成10年7月29日(水)

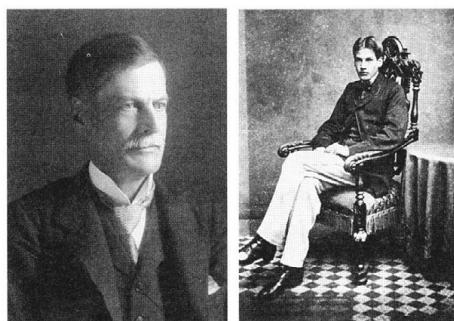
Number  
61

横浜市中区日本大通3番地 〒231-0021 電話 (045) 201-2100  
印 刷／株エイコープリント



「サトウ家の写真アルバム」

「武田家の写真アルバム」



駐清公使時代(60歳頃)のサトウ

来日前(18歳)のサトウ

## アーネスト・サトウ その時代と生涯 —二つのアルバムの邂逅—

一九八五年に開催した「幕末のイギリス外交官アーネスト・サトウ」展で、ご子孫である武田家から写真アルバムを拝借して展示したこと記憶の方も多いと思う。「武田家の写真アルバム」には、一枚におよぶサトウの写真はもちろんのこと、サトウが愛した妻兼や一人の息子栄太郎・久吉の写真

ともあれサトウが日本の家族に残したアルバムと、イギリスへ持ち帰ったアルバムは、滞日的第一歩を踏み出した横浜の地で、長い年月をへてようやく再会することができたのである。これらサトウ関係資料は、今年中に目録を完成し、一般公開する予定である。

(吉良芳恵)

などが美しくちりばめられていた。その後武田家の好意により、当館はこのアルバムとサトウの書簡、著作、蔵書など同家に大切に保管されていた種々の資料を入手することができた。

さらに嬉しいことには、イギリスからもサトウの遺品である別のアルバム「サトウ家の写真アルバム」を入手することができた。イギリスのデボンシャーに住むデーヴィッド・サトウ氏宅の屋根裏部屋から発見されたこのアルバムには、美しい螺伝張りの表紙がなされ、サトウの両親、兄弟姉妹、かわいい甥や姪たちの写真が数多くおさめられていた。その中にはサトウ自身の写真も四枚あり、そのほかウイリス、ミットフォード、ミルン、ヘボン、チエンバレン、シーボルトなどサトウが日本で知りあつた人々の姿も目にすることことができた。なかでも興味をひいたのは一〇枚の日本人の写真で、裏には彼らの名前や一九二一年に出版した*A diplomat in Japan*での言及箇所がサトウの手で記されていた。サトウは膨大な日記やアルバムの写真を見ながら、五〇年前の記憶をたぐつて*A diplomat in Japan*を書いたのである。

ともあれサトウが日本の家族に残

したアルバムと、イギリスへ持ち帰ったアルバムは、滞日的第一歩を踏み出した横浜の地で、長い年月をへてようやく再会することができたのである。これらサトウ関係資料は、今

# 隠退後のサトウ —息子たちと藏書と著作—

## サトウの隠退

サトウが長い外交官生活から隠退したのは、駐清公使の任務を終えた一九〇六（明治三九）年一〇月のことである。六三歳になっていた。しかし同じ頃ハーベーク国際仲裁裁判所のイギリス代表評定員に任命され（六年間在職）、〇七年六月には第二回ハーベーク国際平和会議にイギリス全権委員の一人として出席、また〇七年三月から隠居していたオタリー・セント・メリーの治安判事もつとめているから、全ての公務から解放されたというわけではない。

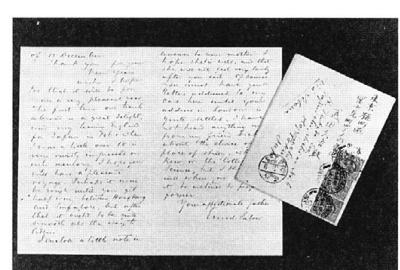
**次男武田久吉の留学**

サトウ隠退後の一九一〇（明治四三年）年、次男の久吉が植物学研究のためイギリスに留学してきた。久吉は一三年に母のため一時帰国をするが同年再び渡英、一五年一二月まで約五年間イギリスに滞在した。この間しばしば父と楽しい時を過ごしたことは言うまでもない。

一九〇九年一一月一〇日付の久吉は、イギリスに到着してから間もない五月四日のことである（母兼あての五月一八日付書簡）。

久吉はスコットランドなど滞英中久吉はスコットランドなどイギリス各地を旅行し、美しい絵葉書を収集してアルバムを作成。日本サトウは出発前の久吉に持参すべき植物学関係の記録や論文などをこまごまと助言している。また一〇年一月一八日付の書簡では、最初の海外旅行は大きな喜びであると述べ、サトウ自身も、一八六一年に一八歳で日本に出発した時のことを鮮やかに憶えていると回想している。久吉は

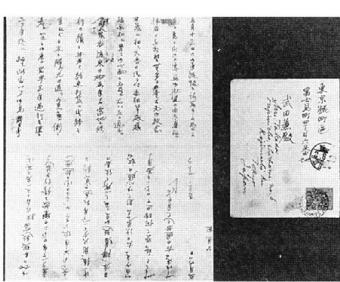
三月二日に日本郵船の「熱田丸」で



久吉あてサトウ書簡（1910年1月18日付）

其終に至れば日本に帰り元の通りまへさまの側に居候筈に御座候。右の次第候間別て御心痛の訳は無之と存候。決て何時迄もロンドンに居事無御座候」と、日本文で書きおくつてある（一九二三年五月二一日付の書簡）。

七月二四日付の書簡でも、サトウはシホルトの*Flora Japonica*を含む日本関係の古書を売つた」と、ツンベルグの*Flora Japonica*とマイスターの*Der Orientalisch-Indianische Kunst- und Lust-Gärtner*は、友人からわらつた本なので手放さなかつた」とを記している。



兼あてサトウ書簡（1913年5月31日付）



久吉あてサトウ書簡（1913年7月24日付）

一九一一年一一月二二日、日本とともに外交官生活をおくり、日本学者としても信頼しあつていたウイリアム・ショージ・アストンが亡くなつた。生前サトウに助言を求めていたのである。アストンの日本関係の蔵書は同年遺産管財人からケンブリッジ大学図書館に売却された（これはアストンコレクションとして知られる）が、近年サトウ旧蔵のものが残されているが、久吉はイギリスの素晴らしい風景を大切な思い出にしていたに違いない。しかし久吉の留学は兼て心細くさせたようだ。サトウは兼て「決て御心配に不及候。右ハ左の通候。当人最初渡米の砌五年間當地に修行の積に拙者と約束相成候。

この一冊の本は旧武田家資料の中にある。サトウ蔵書票が添付されている。また「一九一四年武田久吉」のサインもあるから、久吉はこれらの本を父からもらつたのであろう。ちなみに久吉がノルウェー、スウェーデン、ロシア経由で日本に帰國するのの一九一六年のことである。

*The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610* の復刻

一九一六（大正五）年九月三日、サトウは久吉に、再版にむきそな日本に関する論文のリストと、久吉用記した。一時帰国中の久吉にあてた

一九一六（大正五）年九月三日、サトウは久吉に、再版にむきそな日本に関する論文のリストと、久吉用記した。一時帰国中の久吉にあてた



武田久吉(左)と  
栄太郎夫妻(右)



晩年のサトウ



オタリー・セント・メリーの3名士(絵葉書)

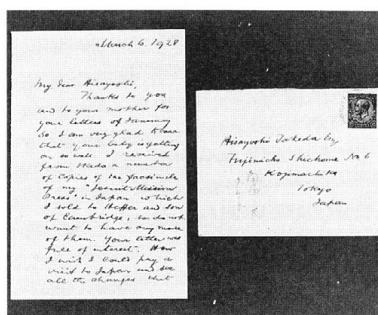
『日本耶蘇会刊行書志』を送付したこと、それには数々所追記をしたことを書き送った。また「日本における竹の栽培」『日本アジア協会紀要』第二七卷、一八九九年)について、カラーの挿し絵は複刻するにても、コストがかかりすぎるから白黒でもよいことを伝えた。

れなかつた。サトウはすでに八四歳になつてゐた。

尻清市の全訳『幕末維新回想記』が刊行された。一九六〇年の「外交官の見た明治維新」は坂田精一の翻訳になるものだが、近年萩原延壽氏が『朝日新聞』夕刊に「遠い崖——アーネスト・サトウ日記やイギリス外交文書などを駆使して、日英関係の壮大な歴史

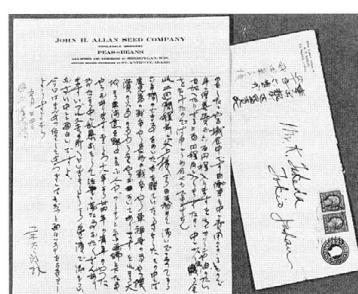
しろ十八年から廿四年の青年のやつた事から中二乱暴なそして活気満た事かたくさんあります。いづれ久吉の所へもいきましようから弟二読で御もらひなさい。中々二面白いですよ」とある。サトウはアメリカのデンヴァーに住む長男にはすぐに著作を送つたらしく、この書簡から

(昭和三)年三月六日付の久吉あて  
サトウ書簡には、この復刻版をイケダ  
ダから多数受け取ったという記述が  
ある。同時に、訪日して最近の日本  
本の変化を見たい気もするが長旅は  
無理であるとつげくわえることも忘



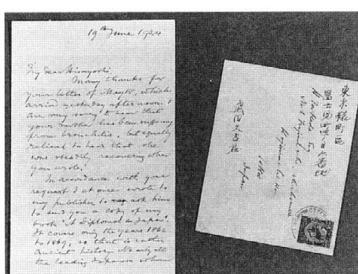
久吉あてサトウ書簡（1928年3月6日付）

A diplomat in Japan



萬葉ノ学士郎畫集（1921年5月24日付）

初めて御いて二なつてから六年間のでき事をかいた本を贈っていた、きまつした。その中には鹿児島の戦争や東禅寺の事やら横浜の火事の事やらなにやらかかいてあります。それから大坂から東海道を、野口と云ふ人や、ワーグマンと云ふ画師とした事やらかあります。なに



久吉庵アガト戸畫稿（1924年6月19日付）

# 小野醇(三四郎)と兄・光景

前回の企画展「新時代への胎動」開化期の横浜市民で、小野光景の実弟である小野醇を、光景あるいは横浜と福沢人脈を媒介したかも知れない人物として紹介した。

光景は弘化二年(一八四五)生れ、幼名を彦太郎、醇は安政二年(一八五五)生れ、三四郎と称した。兄弟の父兵助は、安政六年、郷里の信州上伊那郡小野村(現長野県辰野町小野)を出て、開港直後の横浜に商店「山城屋」を開業した。そして間もなく、町役人として町会所に勤務し、ついで五丁目の名主に就任したようだ。維新後も、横浜五カ町名主に選ばれ、引き続き町政を担当した。明治三年(一八七〇)から四年の兵助の公務日誌(横浜町会所日記)平成三年、当館発行)は、地所押借や営業許可願い、相続・縁組願い、或いは訴訟などを受理し、処理する行政吏の姿を克明に記録している。同時に兵助は、もめ事や金銭貸借の仲立ち、盆暮・節句ごとの贈答などを通じ、住民との交際の幅を広げ、その密度を深めていく。

彦太郎は、病氣で引退した父の跡役を襲つて、明治五年十月二十一日横浜港内第一区之内小に任命された。のち、第一大区一小区副戸長として閑内貿易商人の営業や生活と深く関わり、歩合金取立総務や大区会議長などを歴任、やがて横浜の貿易商人を束ねる実力者となる。その秘鑰は、親子二代にわたる町役人時代にありそうだ。

『町会所日記』に、若き日の兄弟が登場する。明治三年二月二十七日に「今日より彦太郎出勤之事」とある。彦太郎が、正式に町会所に勤め始めたものか。用件は不明ながら二泊で上京したり、葬式や近火見舞に行ったり、兵助留守中の日誌を代筆したり、父のもとで実務経験を積む。一方、三四郎は、姉と浅草辺に住んでいたようだ。日誌には、親戚と思われる東京・外神田の山城屋との年始や贈答、山城屋の頻繁な来浜、彦太郎や三四郎の訪問など親密な交際が記してある。明治十六年、「山城屋安兵衛」の死去を報する兵助あて書簡があり、また開港直後の横浜商人に、兵助と同じ屋号の「山城屋安兵衛」がいる。三者は同一か、なぜ兵助が山城屋を称したか、また兵助と山城屋の関係は、不詳だ。

その後、三四郎は、福沢諭吉の慶應義塾に学ぶ。同塾の『入社帳』や『学業勤惰表』によれば、明治七年(一八七四)三月十二日に入塾、変則第九等から本科第二等まで進み、九年の後半に退塾したようだ。同級生に、のちに兄光景が横浜商法学校(現市立横浜商業高校)の初代校長として迎える三沢進がいた。

翌十年十二月十三日の『横浜毎日新聞』に、小野醇の名で論稿「演説会を勧むる弁」が掲載された。議会開設に備え、演説会を興して知識と弁論術を養うことが今日の急務と力説する。同じ紙面に福沢諭吉らによる町会所での演説会の盛況を伝ええた。表に「島田豊寛之墓」、投書は市民の政治的気運を一層高めたと伝えられる。その広い墓域を通り探してみたが、墓碑の存否、所在は未だ確認出来ていない。ただ、



小野光景  
『横浜成功名譽鑑』  
(明治43年刊)より



小野醇(三四郎)  
小野忠秋氏所蔵

偶然に島田豊寛(源次郎)の墓石を見付けた。表に「島田豊寛之墓」裏に「明治三十五年七月十五日卒」。彦太郎が、正式に町会所に勤めたものか。用件は不明ながら二泊で上京したり、葬式や近火見舞に行ったり、兵助留守中の日誌を代筆したり、父のもとで実務経験を積む。一方、三四郎は、姉と浅草辺に住んでいたようだ。日誌には、親戚と思われる東京・外神田の山城屋との年始や贈答、山城屋の頻繁な来浜、彦太郎や三四郎の訪問など親密な交際が記してある。明治十六年、「山城屋安兵衛」の死去を報する兵助あて書簡があり、また開港直後の横浜商人に、兵助と同じ屋号の「山城屋安兵衛」がいる。三者は同一か、なぜ兵助が山城屋を称したか、また兵助と山城屋の関係は、不詳だ。

その後、三四郎は、福沢諭吉の慶應義塾に学ぶ。同塾の『入社帳』や『学業勤惰表』によれば、明治七年(一八七四)三月十二日に入塾、変則第九等から本科第二等まで進み、九年の後半に退塾したようだ。同級生に、のちに兄光景が横浜商法学校(現市立横浜商業高校)の初代校長として迎える三沢進がいた。

翌十年十二月十三日の『横浜毎日新聞』に、小野醇の名で論稿「演説会を勧むる弁」が掲載された。議会開設に備え、演説会を興して知識と弁論術を養うことが今日の急務と力説する。同じ紙面に福沢諭吉らによる町会所での演説会の盛況を伝ええた。表に「島田豊寛之墓」、投書は市民の政治的気運を一層高めたと伝えられる。その広い墓域を通り探してみたが、墓碑の存否、所在は未だ確認出来ていない。ただ、

明治前期、横浜の政治や経済界に与えた福沢系人脈の影響力はこれまで指摘されてきた。両者をつなぐもの、その接点のひとつが、横浜商人のオルガナイザー小野光景の弟である醇ではなかつたか、との推察を捨てきれない。醇の生涯を含め、今後の課題としたい。

本文で引用した書簡を含め、貴重な資料を提供して下さった小野忠秋氏に、お礼申し上げます。(佐藤孝)



# 太平洋航路の第一船 コロラド号の航海

## 太平洋横断航路の開設

一八六七年、アメリカの太平洋郵船会社が太平洋横断の定期航路を開いた。サンフランシスコ—横浜—香港間を往復する航路である。万延元年に遣米使節が初めて太平洋を渡り、威臨丸が太平洋横断に成功してからわずか七年後のことであった。

地元サンフランシスコでは、一八六年の大晦日に、新航路開設を祝う晩餐会がオクシンデンタル・ホテルの大広間で開かれた。カリフォルニア州知事を筆頭にサンフランシスコの実業界や各界の名士たち約二五〇名が列席。代表的な中国人実業家一人の顔もあった。アメリカ国旗や中国の旗で華やかに飾られた会場では、まずロード州知事が挨拶に立ち、西二人の顔によつて中国と、東は鉄道によつて大西洋岸諸州と直結することができる、カリフォルニア州の将来の繁栄の基礎であると述べるとともに、在米中国人との友好を強調して拍手をあげた (*Daily Japan Herald*, 1867. 1. 25.)。

### コロラド号の横浜寄港

翌一月一日の正午、第一船のコロラド号が、大勢の歓声と汽船の祝砲におくられてサンフランシスコを出港した。

コロラド号は三七五〇トンという当時最大級の外輪船で、一等船客約三百人、二等約二百人、三等は千人単位という収容力を誇っていた。二

等、三等船室がたっぷりとらわれたのは、当時アメリカに大量に流れこんでいた中国人移民や労働者の利用をあてにしたものだった。

石炭をたきつけて二二日半、途中で日付変更線を越え、最初の寄港地横浜に着いたのは一月二十四日（慶應二年二月一九日）午前一時頃だった。港に停泊していたフランス軍艦ゲリエール号の楽隊がアメリカ國歌を吹奏して、第一船の到着を祝した。

すでにイギリスのP&O汽船は三年前、フランス郵船は二年前に郵船の定期航路を上海から横浜まで延ばしていた。当時横浜に駐屯していた英仏軍の軍艦は、自国の郵便船が航行していくのが視野にはいると、それぞれ合図の旗をかけ、一発の号砲を撃つて知らせていたのである。アメリカの郵船第一号はフランス軍艦の祝福をうけて入港した。

横浜で下船したコロラド号の船客は四二人、積みおろした貨物は商品六五七個、貴重品一〇個、アメリカ郵便四袋だった。太平洋郵船会社の横浜の副代理人となるJ. H. フィニーも家族とともに赴任してきた。

『デイリー・ジャパン・ヘラルド』紙は、この日臨時号を出して、コロラド号がもたらした最新の電報を伝えた。幕府の役人數人も寄港中に同じ号を訪れたという（ちなみに日本では二週間前に徳川慶喜が将軍となつたばかりという政情だった）。

## 香港での歓迎

翌二五日、同号は横浜を出港、三日に目的地・香港に到着した。ちょうど一ヶ月の航海であった。ちょ

香港の英字新聞は大々的に「ニュー

スを報じた。コロラド号の到着は中

米間の新しい時代の幕開けであり、

以前から香港に地歩を築いているP

&O汽船やフランス郵船と競争には

なるだろうが、太平洋郵船の主力は

太平洋航路に置かれるだろう、トイ

ギリス系のイヴニング・メイル紙

（翌二月一日から週刊のチャイナ・

メイルが毎夕刊となり、そこに吸収

された）は歓迎の論説をかけた。

二月二六日には香港島一周のクル

ーズが催され、香港提督サー・リチャード・マクダウェルをはじめ一二〇〇

人の人びとが招待に応じてコロラ

ド号に乗り込んだ。銀行や商工会は休

業同然、香港は一時廢村のことき様

相を呈した。一方船上はありとあら

ゆる国籍、言語の人々で大にぎわい

であった。かくして太平洋郵船はヨー

ロッパ系住民の好感を得るのも成

功したのである (*D. J. H.*, 1867. 2. 26.)。

二月一七日、コロラド号は復路に

つき、二月二十五日横浜入港、翌々日

出港、三月二〇日にサンフランシスコに帰港した。

このとき横浜から乗船した乗客のなかに、軍艦・鉄砲の購入のために

渡米した小野友五郎一行がいた。咸

吉も随從し、再度太平洋を渡つた。

前とは違つて「船中の一切万事、實に極樂世界」であった（『福翁自伝』）。

## 太平洋航路の発展

こうしてヨーロッパからの東廻りとアメリカからの西廻りの航路が結ばれて、世界一周の定期航路が成立了。その影響は貿易やビジネスだけにとどまらなかつた。欧米の旅行者や世界周遊の観光客が数を増し、横浜にも多数姿をみせるようになる。一方、サンフランシスコに着く船には「どの船にも多かれ少なかれ」西洋文明を学ぼうとする「金持ちの日本人が乗つて」いるようである。

一方、サンフランシスコ

に着く船には「どの船にも多かれ少なかれ」西洋文明を学ぼうとする

横浜にも多数姿をみせるようになる

のである。

一方、サンフランシスコ

に着く船には「どの船にも多かれ少なかれ」西洋文明を学ぼうとする

横浜にも多数姿をみせるようになる

（伊藤久子）

# マルセイユ

昨年、横浜近世史研究会（当館の委託研究会のひとつ）会員の清水智子氏がマルセイユに長期滞在され、マルセイユに残る横浜および日本関係資料を調査された。そしていくつかの関係資料群を発見され、当館にその情報を寄せくださいったので、ここにその概略を紹介したい。

マルセイユは地中海に面したフランスの港町で、古くから海外との交易で栄えてきた。幕末に日本が開港すると、この港を玄関口として物や人が日本とヨーロッパ大陸との間を往来した。そのようすを窺うことができる横浜および日本関係資料が残っていることが予想され、当館の調査対象地のひとつであった。

清水氏の今回の調査先是以下のとおりである。マルセイユ商工会議所文化財部 (Département du Patrimoine Culturel, Chambre de Commerce et d'Industrie Marseille-Provence)、マルセイユ市古文書館 (Archives de Marseille)、ブショ・デュ・ローヌ県庁 (Préfecture: Conseil général Bouches-du-Rhône)、クリエットマン家 (M. P. Kreitmann) の四か所である。この内、マルセイユ市古文書館を除く二か所で横浜および日本関係資料の存在が確認された。

## マルセイユ商工会議所文化財部

「日本関係資料第一部」及び「第二部」と題された資料群がそれである。前者は実際に清水氏が閲覧し

た。後者は未見とのことであるが、係員によると、一九三七年以降の資料で、主として印刷物だという。以下、「第一部」の内容を紹介する。

一八六〇年に締結された日仏修好通商条約文から在東京フランス商務官作成の一九三八年の月報まで、一点がおさめられている（一六一五年、支倉常長の遣欧使節がマルセイユを通過した時の文書のコピーもあり）。

一八六〇年に締結された日仏修好通商条約文から在東京フランス商務官作成の一九三八年の月報まで、一点がおさめられている（一六一五年、支倉常長の遣欧使節がマルセイユを通過した時の文書のコピーもあり）。



マルセイユ商工会議所

横浜や日本についての実に多岐に渡る経済問題がマルセイユの経済界で検討されたことを窺い知ることができるものである。

在マルセイユ日本領事館関係資料一四三点を所蔵している。ほとんどが領事館員の人事異動の記録であるが、一九二〇年代から三〇年代にかけての次のような資料もある。

日本海軍の軍艦、常磐と吾妻のマルセイユ来航に関する資料（一九二〇年、日賀田男爵一行のマルセイユ通過一件（一九二〇年）、秩父宮マルセイユ訪問一件（一九二七年）などである。

## クレットマン家

内容は経済関係が主である。例えれば、横浜商業会議所がマルセイユ商業会議所 (Chambre de Commerce de Marseille) に宛てた通信開始の挨拶状（一八六五年）などに始まり、マルセイユ商業会議所からの横浜における石鹼製造状況についての問い合わせに対して在横浜フランス領事が送った返答（一八八六年）、フランス政府からのマルセイユ商業会議所宛て日本の内国勧業博覧会への案内状（一八九〇年）、日本の関税率見直し問題に関する一連の文書（一九〇九年～一〇〇年）、フランス紙に報じられた関東大震災直後の日本の紡織物工業の状況記事（一九二三年九月）といった資料がある。

資料の内訳は、日本滞在中の旅日誌、書簡、手帳、地図、講義資料、写真、浮世絵、文書などである。かなりの量の資料群であるが、すでに所蔵者のクリエットマン氏の手によって整理

が済んでいた。また同氏は旅日誌と書簡を翻刻し、写真資料や解説を付して『二年間の日本滞在』(Deux ans au Japon, 1876-1878) という本（既刊二巻）を自費出版されている。

## ブショ・デュ・ローヌ県庁

軍事顧問団関係資料としてこれまでに知っていたのはフランス本省に残った顧問団からの報告書、及びデシャルム (Descharmes) 第一・二次顧問団（騎兵中尉）やルボン (Lebon) 第二次顧問団（砲兵中尉）の残した個人書簡などであった。

当館では英米仏の政府文書や、宣教師関係文書、外交官をはじめとする個人文書などを収集（ほとんどが複写）してきた。その調査・収集にあたっては資料館員が直接出向いて行うのが望ましい方法であるが、予算の問題などで難しく、思ったようには実施できていないのが現状である。そのため、今回の清水氏のよう

な関係者の方々のご協力は、当館の調査・収集活動には無くてはならないものとなっている。

（中武香奈美）

## 閲覧室から

## 五味文庫から（一）

## 真土村騒動関係資料

当館の展示にしばしば登場する五味文庫は、五味亀太郎氏によつて集められた、約一千点の横浜関係資料コレクションです。今後ます発見されることはないと思われる貴重な資料が含まれています。その五味文庫のなかから、今回は真土村事件関係の資料を紹介いたします。なお文庫の概略については、「横浜開港資料館所蔵五味亀太郎文庫目録」（一九九五年 横浜開港資料館刊）をご覧ください。

真土村事件とは、明治一一（一八七八）年一〇月、神奈川県大住郡真土村（現平塚市）の村民二十数名が豪農松木長右衛門一家七名を殺害した事件です。この事件は、地租改正の際の地券発行をめぐる、村人と質取主の質地取り戻しの争いで、多くの人が生活難にあえいでいた社会状況を背景に同情を集め、事件の被告に対する助命嘆願運動では、一万五千人の署名を集めたほど、全国的に反響の大きな事件でした。

一方、真土村事件については、絵草紙といわれる庶民向けの娛樂性に富んだ出版物がいくつか出されました。錦絵表紙の美しい草双紙の一つとして、「冠松真土夜暴動」（かむりのまつまどのよあらし 武田交来録（水）大蘇芳年画 明治一三年 錦寿堂刊）【五味文庫一一一五六】が出版されました。また講談や口説節でも

語られ、「相模國真土村くどき」（明治五年 東京 吉田小吉刊）【五味文庫五一一三二】や「相模國大住郡しんど村百姓そどうくどき」「五味文庫五一二二」といった口説も出版されました。

これら口説のような簡易な木版印刷物は、粗雑な作りであるが故に保存されることが少なく、現在では貴重な資料となっています。また五味文庫には、今回紹介した二点の口説のほかに、心中話などを取り上げた口説がいくつかあり、明治期の庶民生活の一端を知ることができます。今回紹介した資料の請求番号は、「」で示しましたので、閲覧室で請求のうえご覧ください。「石崎康子」

## ●閲覧室からのお知らせ

画像閲覧始まる  
このたび閲覧室にパソコンを設置し、当館所蔵の横浜関係地図および横浜外國商館建物写真的画像閲覧を開始いたしました。御利用下さい。

閲覧室の図書整理のため、左記の期間閲覧室を休室とします。

平成一年二月二四日（火）～二七日（金）  
また月末整理日のため、左記の日も閲覧室は休室になります。

平成一〇年七月三一日（金）、九月三〇日（水）、平成一一年三月三一日（水）  
ご理解とご協力を、よろしくお願ひいたします。

## ▼展示

- 「幕末維新期の英外交官—アーネスト・サトウ その時代と生涯」7／29(水)～10／25(日) 当館が所蔵する英国の外交官アーネスト・サトウの資料を通して、黎明期の日英関係の歴史をたどります。
- 「工業都市への鳴動」(仮称) 10／28(水)～平成11年1／31(日) 19世紀後半から20世紀にいたる横浜の工業化の足取りとその担い手たちを紹介します。
- 「英仏駐屯軍と横浜」(仮称) 平成11年2／3(水)～4／25(日) 新たに収集した英仏駐屯軍に関する資料を通して、外国人居留地とその周辺社会の変化や日本の軍隊の近代化の様相を探ります。

## ▼寄贈資料

- 小泉家古文書ほか 378点 (金沢区六浦町 小泉元久氏)
- 大日本行程大絵図 1点 (中区常盤町力石昌治氏)
- 吉田喜一氏旧蔵文書ほか 29点 (東京都江戸川区江戸川 佐久間隆義氏)
- 貿品届箋 (未使用「町会所歩合掛」用箋・明治初期) ほか 5点 (旭区今宿南町山本嘉太氏)
- 「カメラ」大震災写真号ほか 3点 (横須賀市湘南鷹取 野村義夫氏)

資料館  
だより

▲オリジナル・レフォンカード 横浜浮世絵「横浜仏国役館之全図」明治5年(1872)  
1月、一曜齋国輝によって描かれた明治初年の横浜港の風景で、現在の万国橋付近(中区海岸通5丁目)から眺めたものです。港町らしい賑やかさがあり、フランスの旗がはためいているところが仏国役館と呼ばれていたフランス領事館で、突き当たりは神奈川への渡船場。1枚800円 当館・受付で販売しております。

(6) 日本YMCA史ほか 124点 (中区石川町 大藤啓矩氏)

(7) まつお鉢山むかし話 (第9～20回、社内報の複写) ほか 4点 (東京都千代田区丸の内 松尾物産株式会社)

「幕末維新期の英外交官—アーネスト・サトウ その時代と生涯」展記念講演会

▽日時／10月17日(土)午後2時から4時半まで(午後1時半開場) ▽会場／横浜市開港記念会館 (JR・市営地下鉄の「関内」駅から徒歩12分) ▽講師および演題／萩原延壽(歴史家)「アーネスト・サトウと幕末維新」松浦玲(桃山学院大学教授)「勝海舟とアーネスト・サトウ」 ▽受講料／500円(展示観覧料含む) ▽募集人員／500名

●受講希望者は往復はがきに住所・氏名・電話番号を明記のうえ、9月30日(木)までにお申し込みください。 ▽申し込み先・問い合わせ／〒231-0021 横浜市中区日本大通3 横浜開港資料館講演会係

☎045(201)2100